

安倍首相の話法

—「戦後70年談話」を分析する—

小林 美恵子

1. はじめに

2015年8月14日、安倍晋三首相はいわゆる「戦後70年談話」を発表した。この談話については、ただちに新聞やインターネット上でさまざまな分析や評価・批判が行われた⁽¹⁾。8月15日の朝日・毎日・読売の各紙全国版朝刊から、それらをかいつまんでまとめる。

- ・「侵略」「植民地支配」「痛切な反省」「おわび」などのキーワードは盛り込みつつも、首相自身の歴史認識や気持ちとしては示さなかった。このことに対しては意図があいまいで欺瞞的だという野党側からの厳しい批判があったが、与党側からは歴代内閣の立場を引き継ぎバランスが取れているとの評価もされた。
- ・安全保障関連法案審議への影響や、連立政権を組む公明党への配慮から談話の大半を「歴史認識」に割いている。この点についても「戦前の行動をすべて肯定するような本音が見える」（生活の党小沢代表）、「未来志向という言葉にかなった評価できる内容」（維新の党柿沢代表）など、相反する評価がされた。
- ・日中関係に配慮した表現になっているいっぽう、韓国への言及は少ない。これに対する中国・韓国の批判は対日関係を考慮して抑制的である。また、米国は「反省と歴史に関する過去の談話を継承するという約束がされた」として歓迎の声明を出した。
- ・この談話が踏襲したかどうかをしばしば問題とされる「戦後50年談話」を発表した村山富市元首相は「村山談話が継承されたという認識はない」「長々と言葉に配慮し、苦勞して作った文章（中略）最後は焦点がぼけ、何を言いたかったかさっぱりわからない」（毎日新聞）と厳しく批判した⁽²⁾。新聞各紙の評価もさまざまであるが、中でも朝日新聞は《主語「私は」使

わず》《引用・間接表現目立つ》などの見出しをたて、この談話を批判した。また毎日新聞も《「おわび」歴代表現引用》と「引用」の語を見出しに立てた。

インターネット上でも、「『間接話法』であり、「主語」がない」（田原2015）、「『将来ある若者たちの命が、数知れず失われました』『戦場の陰には、深く名誉と尊厳を傷つけられた女性たちがいた』と受け身形を用いて、加害の主体を曖昧にした』『間接話法を用い、自分の言葉で謝罪の弁を述べなかった』（江川2015）などの言及がみられた。

雑誌『世界』10月号誌上では樋口（2015：59）が「長文である」「私」という主語を慎重に避けている」ことを指摘し、牧野（2015：82）は「性暴力加害者が一人称で語らない」ことにより「一般論を振りかざし、社会や世間を後ろ盾に、抑圧的な文言を述べる」という例になぞらえ、「私は」という主語のないことを厳しく批判している。

これらの批判にあらわれた「主語（私）の不在」「引用」「間接表現」「間接話法」という言い方の多くは談話が「おわび」について述べた「我が国は、先の大戦における行いについて、繰り返し、痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明してきました」という1文が首相自身の「おわび」としてでなく、過去の内閣がわびてきたという事実として述べられたことへの批判である。しかし、この文そのものをみるかぎり、修辞学の用語的な意味においては「引用」「間接表現」「間接話法」という言い方は必ずしもあたらないだろう。

ともあれ、これらの文法や修辞に関する用語によって評価・批判されている「戦後70年談話」（以下「安倍談話」とする）である。では、この談話は実際には、どのようなことばや話法によって、どのように表現内容を構成しているのだろうか。本稿では主語と対応する述部の文末形式のあらわれ方に着目し分析してみることにする。

なお、「戦後50年談話」（村山富市1995、以下「村山談話」）、「戦後60年談話」（小泉純一郎2005、以下「小泉談話」）をあわせて比較検討する。

「村山談話」は1995年8月15日に当時の村山首相が発表した談話で、「侵略」「植民地支配」「反省」などを列挙し、首相自身の立場で「おわび」の意を示している。歴代首相の中ではじめて「国策の誤り」を明確に認めたもの

とされる。「小泉談話」はその10年後、2005年8月15日に、首相の靖国神社参拝に対する中国の批判、反日デモなどへの対応としての意味も含めて発表された。「アジア諸国」に与えた苦痛・損害を明記し、そのうえで「アジア諸国」との交流・理解・信頼などへの意志を繰り返し述べている。

これらは、いずれも政府内の関係者が文案を固め、閣議での決定を経て発表されたものである。今回の「安倍談話」の場合は、首相自身の記者会見によれば「21世紀構想懇談会の有識者の皆様の提言」にもとづいて作成したとのことである。いずれにしても「談話」とはいえ、「口頭で語ることを念頭においた文章」というべき、十分に練られたものであり、首相個人の話し方や日常の使用語彙などが自然のままに反映されているわけではない。

分析のために使用したテキストは、「安倍談話」については首相官邸 HP「安倍内閣総理大臣記者会見」で実際に動画配信つきで文字化されているものを各紙に掲載された「談話全文」で補い、「小泉談話」については首相官邸 HP「小泉総理の演説・記者会見」、「村山談話」については外務省 HPによった。これらをそれぞれエクセルによって文字化データとし、分析した。

それぞれのテキストの句点ごとの区切りによって1文を1行としてデータ化したところ、「安倍談話」は78文3360字、「村山談話」は20文1292字、「小泉談話」は17文1134字であった⁽³⁾。「安倍談話」は1文平均43字、「村山談話」は65字、「小泉談話」は67字で、「安倍談話」の全体の長さとして1文の短さは他に比較して特徴的である。ただし、最も長い文は「安倍談話」108字、「村山談話」103字、「小泉談話」119字で、100字以上の文の数もそれぞれ2文ずつと変わらない。いっぽうで「安倍談話」には他の2談話にみられない10字以下の文も4例あるなど、長短の文を織り交ぜていることが、平均文字数の値を下げているとみられる。

2. 主語と述部

以下の表1～3はそれぞれの談話全文の主語と、それに対応する述部の文末形式を整理し使用数の多い順にならべたものである。表中および以下本文中のVは動詞、Nはいわゆる形容動詞語幹相当までを含む体言を示す。

表1 「安倍談話」の主語と述部の文末形式

	述部文末\主語	私	私たち	我が国	日本	その他 (人)	その他 (事象)	なし	合計
1	Vました			2	5	3	8	3	21
2	Vて（まいり）ます		1	2				4	7
3	Vます		4				2	1	7
4	N							6	6
5	V						1	3	4
6	Vた				1	1	2		4
7	Nであります						2	1	3
8	Nです						3		3
9	Nを							3	3
10	Vてはならない							3	3
11	Vなければなりません		2			1			3
12	Vてはなりません							2	2
13	Vません						1	1	2
14	と考えます・思います							2	2
15	Nであったか						1		1
16	Nでありたい			1					1
17	Nでありました						1		1
18	Vて（まいり）ました							1	1
19	Vています					1			1
20	Vでしょう						1		1
21	Vなければならない		1						1
22	Vべきである			1					1
	合計	0	8	6	6	6	22	30	78
	%	0	10.3	7.7	7.7	7.7	28.2	38.5	100

表2 「村山談話」の主語と述部の文末形式

	述部文末\主語	私	私たち	わが国*	日本	政府	その他 (事象)	なし	合計
1	Nであります	1		1			1		3
2	Nで(おり・まいり)ます	2				1			3
3	Vます		1				1	1	3
4	Vました			1			1		2
5	V (いたし) ます	1						1	2
6	と (いたし・申し) ます							2	2
7	と考えます・思います							2	2
8	Vなければなりません		1	1					2
9	Vて(まいり)ました				1				1
	合計	4	2	3	1	1	3	6	20
	%	20	10	15	5	5	15	30	100

* 「村山談話」のテキストとした外務省 HP では、「わが国」の「わが」はひらがな表記である。以下本文もそれにならう。

表3 「小泉談話」の主語と述部の文末形式

	述部文末\主語	私	私たち	我が国	日本	その他 (人)	その他 (事象)	なし	合計
1	Vています					4	2	1	7
2	Vました			2					2
3	Vであります	1					1		2
4	Nです			1				1	2
5	Vます							1	1
6	N (いたし) ます			1					1
7	Vて(まいり)ました							1	1
8	と考えます							1	1
	合計	1	0	4	0	4	3	5	17
	%	5.9	0	23.5	0	23.5	17.6	29.4	100

2.1 主語

2.1.1 自分（の側）を表す主語

「安倍談話」は朝日新聞などでも指摘されたとおり、「私」を主語とする文は1例もなく、また主語以外としても「私」は1例もあらわれなかった。かわりによく使われているのが「私たち」で、主語として8例、主語以外に文中で使われているものをあわせると14例におよぶ。そのほかに「我が国」「日本」も主語として6例ずつあらわれる。一国の首相としてこれらの語を使う背景には「自分が代表している国」という意識があるはずで、「私たち」も単に自分を含む複数を表すというよりは、国の代表として、自分を含む国民という意識で使われていると考えられる。

「村山談話」では「私」を主語とする文は20文中4例で主語の20%を占めるが、「わが国」「日本」、それに「政府」もあわせて5例用いられている。「村山談話」での、これらの語の使い分けは比較的明確である。歴史的な事実として、過ちも含む過去の日本の経験を語る文脈では「わが国」「日本」、政治的方針やそれらにもとづき展開している施策を語る文脈では「政府」が使われている。「ややもすれば平和の価値を忘れがちになる」「戦争の悲惨さを若い世代に伝えていくべきだ」というような一般論的な状況分析や希望などの文脈では「私たち」が用いられる。また、「私」は「敬意の念を表す」「誠実に対応していく」「おわびの気持ちを表明する」「信じている」など、自らの意志や心情を表す文脈で用いられ、4例中3例は「いたします」「おります」と敬語（丁重語）・丁寧体とともに用いられている。

この使い分けは「小泉談話」の「私」「我が国」でもほぼ同じように行われているが、「小泉談話」では、結びは「平和を愛する我が国は、志を同じくするすべての国々とともに人類全体の平和と繁栄を実現するため全力を尽くすことを改めて表明いたします」とあり、「表明する」という行為の主語を「私」ではなく、「我が国」としている。

翻って、「私」を用いず、「私たち」「我が国」「日本」を、自分（の側）を表す主語とする「安倍談話」は、歴史的な事象や日本の経験に関する言及や一般論的な状況分析、希望・期待などを中心に構築され、自らの意志や心情

は示さないか、または「私」個人ではなく「国」の意志としているということになるだろう。また、「私たち」を用いない「小泉談話」は、そのような一般論的な状況分析や希望を述べないということが、その談話全文からも読み取れるのである。

2.1.2 その他の主語

自分以外の他者や、事物・事象・概念など（表1～3中では「事象」とした）を主語とする文の出現が、「安倍談話」（28例35.9%）「小泉談話」（7例41.2%）ではめだつ。

自分以外の他者とは、「人々」「市井の人々」「無辜の民」「戦後生まれの世代」「親の世代」「日本人」（以上「安倍談話」）、「同胞」「戦後生まれの世代」「日本国民」「日本人」（同「小泉談話」）などである。いずれも日本人やアジアの人々の一部または全部を別の言い方で表したものと見てよい。これらは、多くは過去の歴史的な事象や、現在の状況などを語る文脈で主語として用いられている。なかでも「（原爆・空襲・沖縄地上戦で）市井の人々が犠牲になった」「（アジア・太平洋の戦場になった地域で）無辜の民が苦しみ、犠牲になった」「先の大戦で、三百万余の同胞が（中略）異郷の地で亡くなられた」というように、犠牲者を主語として装飾的な語句で情意的に使われた紋切り型の表現がめだつ。「村山談話」には、このような他者を主語とする文は1文もなく、「犠牲」については「今、あらためて、あの戦争によって犠牲となられた内外の多くの人々に思いを馳せるとき、万感胸に迫るものがあります」のように、話者自身の感情を表す文として記述されている。

人以外の事象や概念を主語とする文が多いのも「安倍談話」の特徴である。78例中22例（28.2%）と、「村山談話」（3例15%）「小泉談話」（3例17.6%）をはるかに上回っている。「植民地」「戦争」「日本経済」「政治システム」「歴史」などの主語は、やはり歴史的な経験を語る文脈で用いられ、「歴史とは実に取り返しのつかない、苛烈なものです」「一人ひとりに、それぞれの人生があり、夢があり、愛する家族があった」のように事実よりもむしろ情意的な見かたを示している。22例中繰り返して使われるのは「命」

「責任」の2語2例ずつだけで、20種のさまざまな主語の使用が「安倍談話」の語り口に多彩な印象を与えているといえよう。

2.1.3 主語のない文

主語が明示されない文は、「村山談話」「小泉談話」ではそれぞれ6例、5例と30%程度だが、「安倍談話」では30例（38.5%）と高めである。

「村山談話」の6例の主語のない文は「「杖は信に如くは莫し」と申します」と、成句を引用した1文を除いては「～と思います」「～と考えます」「哀悼の念を捧げます」など話者自身の心情を示す文であり、省略されている主語は「私」であると察せられるものである。「小泉談話」の場合も、直前文の主語「我が国」を受けて、同じ主語を省略して続けたと考えられる1文のほかは「～する決意です」「～と考えます」のような心情・意志を示す文である。

「安倍談話」の場合、主語のない文30例のうち12例は直前の文ないし本文中に主語に相当すると考えられる語があり、それを受けて主語が省略されたと考えられる文、7例が心情や決意を述べる文といえる。そのほかに「安倍談話」には次のような主語が明示されない文がみられる（以下の文の認定については、発表された談話全文の句点にしたがっている）。

（例1）1・2・3⁽⁴⁾

- 1 事変、侵略、戦争。
- 2 いかなる武力の威嚇や行使も、国際紛争を解決する手段としては、もう二度と用いてはならない。
- 3 植民地支配から永遠に訣別し、すべての民族の自決の権利が尊重される世界にしなければならない。
- 4 先の大戦への深い悔悟の念と共に、我が国は、そう誓いました。

（例2）6・7・8

- 5 ですから、私たちは、心に留めなければなりません。

- 6 戦後、6百万人を超える引揚者が、アジア太平洋の各地から無事帰還でき、日本再建の原動力となった事実を。
- 7 中国に置き去りにされた3千人近い日本人の子供たちが、無事成長し、再び祖国の土を踏むことができた事実を。
- 8 米国や英国、オランダ、豪州などの元捕虜の皆さんが、長年にわたり、日本を訪れ、互いの戦死者のために慰霊を続けている事実を。

(例1)では、名詞のみを羅列した文1のあと「事変」「侵略」を受けた「武力の威嚇・行使」や「植民地支配」をしてはならないとする主語非明示文を繰り返し、最後に1～3を受ける形で「我が国が誓った」とまとめる。1～4文を受けた全体の主語が「我が国」であるとみることもできるが、談話の流れとしては1～3のように主語を明示しない文が繰り返される形式になっていて、動作主と対象の関係が曖昧化し、「世界の国々」を主語とする一般論としても解釈できる。

(例2)は6～8は主語非明示で、5の「私たちが心に留めなくてはならない」ことを倒置文の形式で、これも3文にわたって、戦争による日本人の「被害」とその克服、元捕虜にも好意を寄せられていることを、「事実を」ということばで繰り返す。日本は悪くない、大変だったががんばったという強調の文体といえよう。

なお、1のような体言文は6例あり、繰り返してたたみかける論調とともに、「安倍談話」に特徴的な語り口である。

2.2 述部の文末形式

2.2.1 多用される文末形式

「安倍談話」には22種の形式があらわれたが、もっともよく使われているのは「Vました」で78文中21文(26.9%)がこの形式で主語を受けていた。普通体の「Vた」も4例あり、あわせると3分の1近くになる。「Vました」「Vた」文は一般的に以下のように過去の「事象」を語る文となる。

9 圧倒的な技術優位を背景に、植民地支配の波は、19世紀、アジアにも押し寄せました。

10 私たちの親、そのまた親の世代が、戦後の焼け野原、貧しさのどん底の中で、命をつなぐことができた。

「安倍談話」が過去の歴史的事象の記述に多くを割いたということを、この形式の多用は裏付けている。実際に談話中2文目から27文目までの26文中19文にわたって「Vました」「Vた」の繰り返しにより、「100年以上前の西洋諸国の植民地時代」から「日本の敗戦」までの歴史的経験が語られている。しかも9、10のようにこれらの社会的事象は外から「押し寄せ」たものとして日本は受け身の立場、そして苦悩の中で命をつなぎ克服「できた」と可能形で語るにより、文型としては受け身ではないが、全体が受け身の立場から書かれていることも察せられる。

「安倍談話」では、また、「Vてはなりません」「Vてはならない」「Vなければなりません」「Vなければならぬ」「Vべきである」などの禁止や強制を示す形式も全部で10例（12.8%）とめだっている。そのうち5例の主語は「私たち」「私たち日本人」「我が国」で、首相として国民を代表して決意表明をしたものといえるが、5例は主語非明示の文である。先にあげた（例1）2・3のように、主語に該当する語を後続の文で示すこともある。

（例3）

11 あの戦争には何ら関わりのない、私たちの子や孫、そしてその先の世代の子供たちに、謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません。

12 しかし、それでもなお、私たち日本人は、世代を超えて、過去の歴史に真正面から向き合わなければなりません。

11は、今回「安倍談話」の中で、それまでの談話にはみられなかった首相自身の「謝罪の打ち切り」への主張を出したと話題になった文である。主語を明示せず漠然と聞き手に義務を負わせるような言いかたをし、後続の12で

「私たち日本人」という主体にはじめて焦点が絞られていく。ここにみられるのは「Vてはならない」という強制を主語の非明示によって緩和し、耳ざわりをよくする、一種の婉曲話法とでもいうべきものではないだろうか。

なお、すでに（例1）～（例3）でも示されたとおり、「安倍談話」では同じ主語・文末形式をもつ文の繰り返しも特徴的にあらわれている。後半、首相としての決意表明をする、いわば大詰めでは

（例4）

- 13 私たちは、国際秩序への挑戦者⁽⁵⁾ となってしまった過去を、この胸に刻み続けます。
- 14 だからこそ、我が国は、いかなる紛争も、法の支配を尊重し、力の行使ではなく、平和的・外交的に解決すべきである。
- 15 この原則を、これからも堅く守り、世界の国々にも働きかけてまいります。

をはじめとして、「私たちは～この胸に刻み続けます」といういささか情緒的な言い回しと「だからこそ～」「Vてまいります」の繰り返しだが、4回にもわたって出現するのである。

「小泉談話」では「Vています」文が7例（41.2%）と突出している。これらの文の主語はすべて自分以外の他者や事象・概念で、次の16のように現状認識を示しているが、17のように過去の歴史的な事象についても現在のこととして「Vています」で語るところが「小泉談話」独特の語り口といえよう。

- 16 今世界各地で青年海外協力隊などの多くの日本人が平和と人道支援のために活躍し、現地の人々から信頼と高い評価を受けています。
- 17 先の大戦では、三百万余の同胞が、祖国を思い、家族を案じつつ戦場に散り、戦禍に倒れ、あるいは、戦後遠い異郷の地に亡くなられています。

「村山談話」には「安倍談話」「小泉談話」のように突出して使われる形式はなく、9種の文末形式が3～1例ずつバランスよくあらわれている。過去の事象について語る「Vました」、「私たち」「わが国」の決意を表明する「Vなければなりません」も2例ずつ、また「Vています」はないが「Vております」で示す現状認識も2例と、内容面でもそれぞれが網羅されている。

なお、「村山談話」には3例（15%）の「Nであります」がみられる。「小泉談話」では2例（11.8%）、「安倍談話」でも「Nでありました」を合わせて4例（5.1%）と出現の割合は減っているもののどの談話にもみられる。歴代首相の所信表明演説を分析した東（2006：44-45）によれば「～あります」（「Nであります」）は演説口調の代表格で、戦中の首相演説では91%を占めていたが、その後減少し、2001年の小泉首相の所信表明演説では27%になったという。3談話はいずれも、この小泉首相の演説に使用率では及ばないが、2015年の安倍談話でも、まだこの形式が使われているのは興味深いことである。

2.2.2 文末形式の待遇表現

「村山談話」「小泉談話」では、すべての文は「です・ます」を基調とする丁寧体で語られている。特に「村山談話」では、表2にみるとおり、「おります」「まいります」「いたします」「申します」など、敬語（丁寧語）を含む形式がよく使われており、20文中8例（40%）に上る。全体的に丁寧に聞き手に語りかけという文体である。「小泉談話」の場合は、「まいりました」と「いたします」がそれぞれ1例ずつ（11.8%）あるが、全体としては「です・ます」基調の平易な文体といえる。

「安倍談話」の場合には表1にみるとおり、「N（体言文）」「V（動詞言い切り）」「Vた」「Nを」などの普通体の文が25例と32%を占めている。丁寧語を含む丁寧体文末は「まいります」7例、「まいりました」1例で、合計8例（10%）である（ただし、含まれている丁寧語は「まいる」のみで、「村山談話」のような多彩さはない）。「安倍談話」は丁寧語を含む丁寧体から、丁寧体・普通体・助詞止めや体言の言い切りまで多様な文末形式がちりばめ

られた談話であるといえる。先にあげた（例１）（例２）（例４）のように、普通体文の繰り返しを丁寧体文でまとめたり、倒置文の従属節部分を同一語句（体言＋助詞）で繰り返したり、パターン化された丁寧体文、普通体文、丁寧語を含む文を繰り返すなど、変化をつけた言い回しによって調子を高めていく。普通体や体言の言い切りは談話全体にアクセントをつけ、聞き手を鼓舞する意図をもって発話されているとも考えられるが、いっぽうで聞き手を無視するかのように高飛車な、ひとりで酔っているかのような印象を与えることも否めない。聞き手（読み手）を対等な立場として意識・尊重し、理解を得ようとする談話という印象ではない。

3. まとめ

「安倍談話」の話し方の特徴をまとめると、

- ① 主語「私」の不使用と、自分以外の他者や事象・概念を主語とする文の多用により、自身の意志や心情を直接的には表さず、自身の歴史認識であっても、あたかも客観的な事実であるかのように述べる。
- ② 「市井の人々」「無辜の民」や「この胸に刻み続けます」のような紋切り型の、装飾的表現とも情意的表現ともいえるような言い回しがめだつ。
- ③ 文末形式「Vました」の多用により、淡々と、客観的に過去の事象を述べているようだが、いっぽうで「Vてはならない」「Vなければならない」などによる強制もめだつ。
- ④ 同一の文・語彙や近似した言い回しの繰り返しによりたたみかけていく。
- ⑤ 丁寧体文・普通体文や体言文、助詞止め、また短文・長文をちりばめ、形式面では変化に富んだ話し方である。

ということになる。いわばレトリックを駆使した文体であり、話者自ら酔い、聞き手をも酔わせようという効果をねらっているとも考えられるが、話者の率直な心情・主張や聞き手・読者への語りかけをくみ取ることは難しい談話といえる。いわば、どうしても解釈できる「玉虫色」の談話である。それゆえ批判・評価が相反するという結果にもなるのであるが、問題は、これが一国の首相が国民に語りかける談話として確信的に行われているということ

あろう。首相が国民に求めているのは理性的な理解・支持ではなく、ムードとしての共感であり、盲信的な追従であるように思われてならない。そんな談話なのである。

注

- (1) その後おもに10月号の論壇諸雑誌などでもこの談話に関する論評が特集されたが、こちらは、当然ではあるが、雑誌によって評価が正反対に分かれる。『正論』などの右派系雑誌は「『東京裁判史観』を払拭した」（渡部2015）などと肯定・歓迎の論調だが、『世界』などは「主体性を欠いた歴史認識」（三谷2015）と厳しく批判している。批判する側は、談話の修辞にあらわれる基本的な認識の態度などを問題にするのに対して、肯定側は「自虐史観」「東京裁判史観」（要するに日本は侵略を謝罪しなくてはならない）を払拭した談話であると評価しており、その批評の方向はまったく噛み合っていない。
- (2) この村山発言に対しては「読解力のなさを披露した」（阿比留2005）という逆批判もされた。
- (3) この字数はテキストの表記にしたがい2音節以上の漢字も1字、句読点も1字として数えたものである。「安倍談話」については音声があるので音節数を数えることも可能であるが、「村山談話」「小泉談話」については音声資料がないので、このように数えることにした。テキストにより若干の異同はあると思われる。
- (4) 用例の示し方は以下のとおりである。

（例1）（例2）のようにカッコでくくった例示は、一続きの連続した発話である。このうち、各発話文の先頭には通しの番号をつけ、記述内容に該当する文例については、カッコわりに番号を表示した。また、カッコのない通し番号9、10などは、連続しているわけではない個別の用例を示している。
- (5) 常識的にいえば「国際秩序」の「違反者」また「破壊者」とでもいうべきところであろう。肯定的な含みを持つ「挑戦者」とすることにより、「国際秩序」は乗り越えられるべき壁—困難と規定されたことになる。このような語の選び方も「安倍談話」の話法として特徴的であるが、今は検討しない。

引用テキスト

- 安倍晋三（2015）安倍談話 『首相官邸 HP・総理の演説記者会見』
http://www.kantei.go.jp/jp/97_abe/statement/2015/0814kaiken.html
- 村山富市（1995）村山談話 『外務省 HP・「戦後50周年記念日にあたって」』
http://www.mofa.go.jp/mogaj/press/danwa/07/dmu_0815.html
- 小泉純一郎（2007）小泉談話 『首相官邸 HP・小泉総理の演説・記者会見等』
<http://www.kantei.go.jp/jp/koizumispeech/2005/08/15danwa.html>

参考文献

- 東照二（2006）『歴代首相の言語力を診断する』 研究社
- 阿比留瑠比（2015）「「戦後70年談話」に込められた首相の真意」『正論』10月号 527
pp. 74-79 産経新聞社
- 江川紹子（2015）『江川紹子の「事件ウオッチ」第35回』
http://biz-journal.jp/2015/08/post_11149.htm（2015.8.19）
- 田原総一郎（2015）「安倍首相「戦後70年談話」、僕はこう読んだ」『田原総一郎公式
ブログ』 <http://www.taharasoichiro.com/cms/?p=1424>（2015.8.31）
- 樋口陽一（2015）「歴史と記憶―戦後七〇年首相談話に関連して」『世界』10月号 874
pp. 58-63 岩波書店
- 牧野雅子（2015）「「性暴力被害者の語り」と安倍談話」『世界』10月号 874 pp. 81-85
岩波書店
- 三谷太一郎（2015）「主体性を欠いた歴史認識の帰結は何か」『世界』10月号 874
pp. 64-68 岩波書店
- 渡部昇一（2015）「東京裁判史観を突破した「縦の民主主義」の歴史力」『正論』10月
号 527 pp. 64-73 産経新聞社

（こばやし みえこ・早稲田大学）